

# 言論の場から考える、文章の論理／論証

広島大学 難波博孝

## 0. 大前提

文章／談話（あわせてテキスト）は、コミュニケーションメディアである。

文章／談話の意味は、文章や談話の「言語」だけをいくら分析しても分からない

文章／談話の意味＝ [言語的意味＋場面＋書き手（話し手）の相手意識＋書き手（話し手）の目的意識＋音調やノンバーバル（書き言葉なら文体など）＋・・・] という材料に読み手（聞き手）が推論することで決定される

例：「私は納豆は嫌いである。納豆はねばねばしているのである。」（文章）

→この文章の意味＝ [話し手は納豆は嫌いだ。その理由は、納豆がねばねばしているからだ]

（□部分が、推論による補充。ただし、これが唯一の解釈ではない）

# 1. 言論の場 (=書き言葉における、コンテキスト)

## 1. 1. 単一状況

送り手1 → 文章1 / 伝達手段1 → 受け手

送り手は、(1) あるテーマについて (2) 特定の受け手に (3) 特定の目的で (4) 特定の伝達手段で 文章を受け手に届ける。

(1) . . . . 環境保護、製品の取扱、お礼 . . . .

(2) . . . . 不特定の子ども、購買者、特定の知人 . . . .

(3) . . . . 論証、説明、伝達 . . . . (=ジャンル)

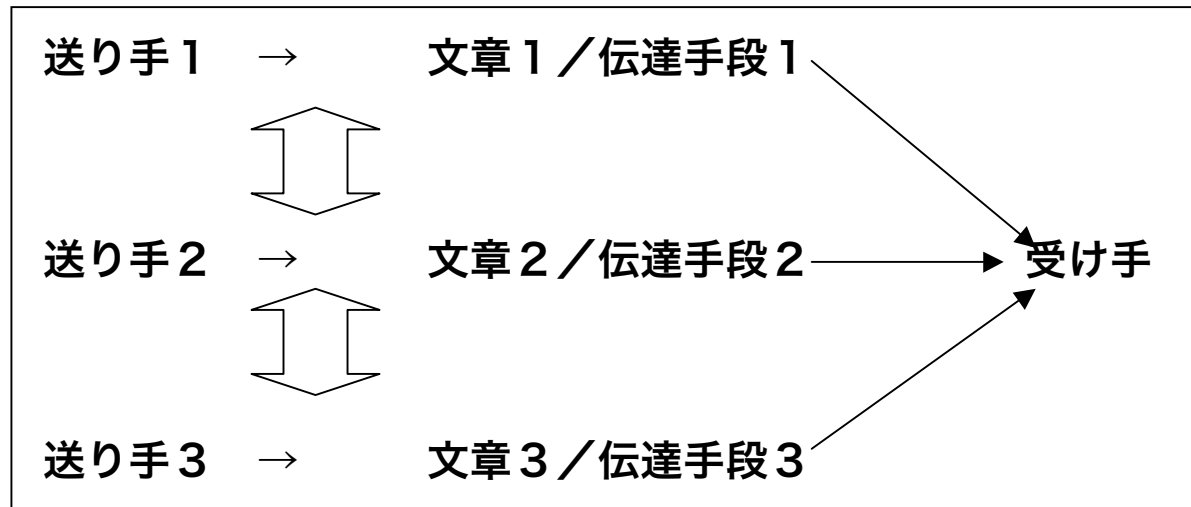
(4) . . . . 単行本、パンフレット、手紙 . . . .

= 言論の場

文章の意味は、[言語的意味+言論の場] への推論によって決まる

例：「このたび、○○を買ってくださりありがとうございました。」

## 1. 2. 複数状況



異なる送り手によって、同じテーマで／同じ特定の受け手に／同じ目的で／同じ伝達手段で文章が生まれることがある。この異なる文章も含めて「**言論の場**」が形成される＝文章3を書く時、文章1や2を意識して書かれるし受け手も意識して受け取る

例：広告、論文、ファンレターメール・・・

## 2. 言論の場を考慮に入れた、論理／論証

- ・ 宇佐美 (2008) 「この本は語用論に基づく〈論理〉教育の改革の本である。(p.3)」

＝論理／論証も、言論の場というコンテクストに影響を受ける

- ・ 難波 (2010) (配布雑誌 「論理／論証教育の思想 (2) -論理の教育および論証の妥当性について-」)

「論理」・・・ある項目 (文／語／情報など) とある項目との因果関係

「論証」・・・ある「領域」(Toulmin によれば”field”) において妥当性を追究する過程

- ・ 論理／論証 の テクストレベルでの整理 (難波 2008 による)

ミクロ構造 (二文間) = 結束構造 + 結束性

マクロ構造 (文章全体) = 文章構成 + 思考構造

## 2. 1. ミクロ構造 (1) 明示的なつながり = 結束構造について

例：納豆はねばねばしている。けれど、私は納豆は大好きだ。

結束構造の種類		構造の性格
指示		あらわである
接続		
語彙的結束構造	反復	
	省略	かくれている
	関連語句の反復	
提題		あらわである
叙述		
略題		(主題が) かくれている
状況表現		(状況の範囲が) かくれている
語用論的結束構造		語用論的である

難波 (2008)

※これらは、論理や論証とは関係ない = 接続語や指示語は論理や論証とは直接関係ない

## 2. 2. ミクロ構造 (2) 暗示的につながり=結束性について

例：納豆はねばねばしている。私は納豆は大好きだ

→ 二文の間に読み手（聞き手）は、状況や文脈に合わせてなんらかのつながりをつくる＝文脈依存でありかつ読み手次第である一方で、完全に読み手の自由ではなく、状況や文脈によって制限されている＝「(関連性理論のいう) 関連性」のあるつながりをつくることを期待されている。

論理

メッセージの内容どうしの関係	時間関係 因果関係 手段-目的関係
メッセージと発信者との関係	評価関係
メッセージと受容者の関係	ことがら-説明関係 (背景の説明や原因の説明)
ことがらどうしの関係	類比関係 一般-特殊関係 例示-まとめ関係 対比関係

難波 (2008)

※**論理**とは 結束性の一部であり、暗示的なつながりである←コンテクストに影響される

## 2. 3. マクロ構造

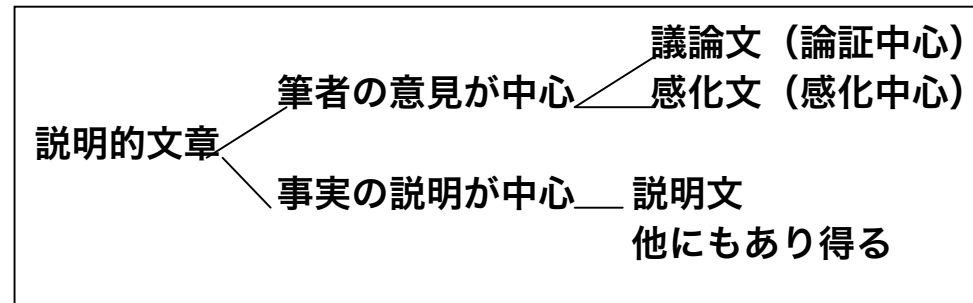
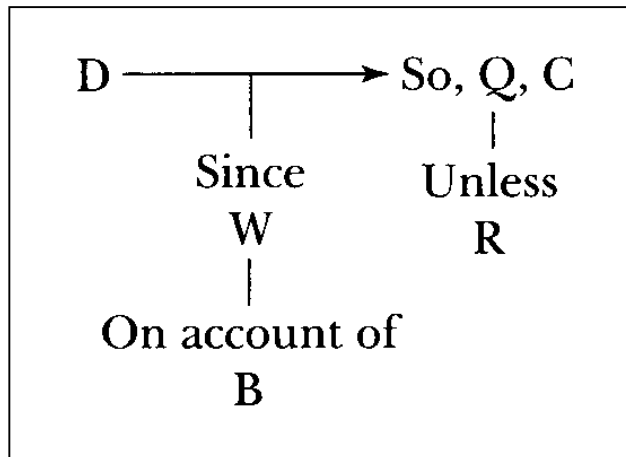
文章構成は明示的・・・段落／接続語（このように）／指示語 など

思考構造は暗示的

構造の特性	名称	構造の具体例（非文学的文章の例）
顕在的な構造	文章構成	頭括型／尾括型／双括型など
顕在的な構造	思考構造	（下記以外に多くあり得る） 一般-特殊型 前提-譲歩-持論型 問題解決型 現実的な問題解決型 科学的な問題解決型 （Toulmin 的）論証など

※ 思考構造＝文章全体のまとまりを背後で支える構造→その中に「科学的な問題解決」＝（Toulmin 的）論証←Toulmin が示したのは、論証は領域依存している一方で、共通の構造を持つ、ということ → ほかにどのような思考構造がありうるのか解明されていない  
 非文学的文章でも論証以外の思考構造があるし、文学的文章にも特有の思考構造がありうる

## 2. 4. (付) 論証以外の、非文学的文章の思考構造のバラエティー



注：○○文＝ジャンル＝目的

## 3. 言論の場と結束性（その中の論理）、思考構造（その中の論証）

※ テクストの思考構造を決めるのは、文章そのもの、文章の言語そのものだけではない  
＝ 1 ページに戻る（論理は、言論の場から切り放されてもある程度決定できる）

テクストの思考構造は、そのテクストの言論の場を見なくては実際はわからない＝（1）テーマ（2）受け手の特定（3）目的（ジャンル）（4）伝達手段（5）他のテクスト が見えないと、そのテクストが実はどのような思考構造をもっているかはわからない

例：PISA 警察問題



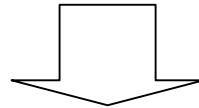
## 4. 教科書という問題

(発表要旨参照)

通常のテキストは、必ず言論の場とともに生成している

教科書は、言論の場（文章のコンテクスト）と切り離されている

教科書教材文は、原文から必ず改変されている（言語だけでなく挿絵や装丁なども含めて）



教科書だけをいくら分析しても、その文章の目的（ジャンル）は明確にできない

=その教材文の思考構造も明確にはわからない← 教材文を批評的に読むことはできない

長岡（2006）の研究より

- ・ 原本は「説明」であること（筆者の意見はあとがきのみ）
- ・ 教材文の「結論部」は「主張」である一方で、そこまでとつながっていないこと
- ・ 教材文の「目的＝ジャンル」が不明確である一方で、言論の場と切り放されているため、「説明として読むのか、論証として読むのか」を決定できない→解釈が不可能になっている

※ 原文から教材文への改変そのものが問題ではない。

- ・教科書というメディアそのものの「脱言論の場」性質の問題
- ・文章の目的（＝ジャンル）に無理解な日本の国語教育業界（研究者／出版社など）の問題

## 5. 未来への展望

- ・新学習指導要領に、ジャンルが盛り込まれている
- ・ジャンルに合わせた、読むこと書くこと話すこと聞くこと教育を考える
- ・ジャンルと論証との関連を明確にして、それに合わせた教育プログラムを考える
- ・論理（結束性の一部）は、教材文での教育が可能
- ・井上の論理を結束性と置き換え、この全てを育てるのを「思考の教育」、その一部である「論理」を育てるのを「論理の教育」として、区別しつつ両面をやっていくべきであり、これらは現在の教科書でできる
- ・日本の国語教育業界が「書いていないこと」について、理解と関心と知識を持つ。

参考文献は、雑誌および要旨に。難波関係の論文は、ネットに（「母語教育へ」）